

教育実習当日を迎えるまで、正直なところ「3週間って長いなあ〜。」って思っていました。それも7:30~18:30という時間を5回×3セット繰り返すと考えていたからでしょうか。しかし、実際に教育実習が始まると時間が過ぎるのはあっという間で、気が付いたら夜なんて日が何回もありました。3週間という期間は長くなく、むしろ短いものでした。

実習期間中、幸いなことに体育祭があり、参加させていただきました。今回は“やる”側から“やらせる”側へと立場が変わっての参加でしたが、そうしたことでたくさんことを学ぶことが出来ました。“やる”側だった生徒時代、「楽しかったな」だけで終わってしまう一学校行事としてしか見ていなかった体育祭ですが、今回“やらせる”側である教員として参加し、先生方が何回も繰り返し、指導委員会を開催して話し合い、生徒とのコミュニケーションも取り、上手に妥協しながら、一つ一つ積み上げながらたくさんの準備をしてくださっているということ、後始末(忘れ物の管理、片付け)など見えない努力をしてくださっているということを知りました。「生徒たちの笑顔の為に」「生徒たちの成長の為に」動いてくださっていることを知りました。

教育実習のメインであろう授業実践については、実習時期がテスト期間後ということもあり、実際に授業を行うのに時間が空きました。その間、自己紹介・質疑応答をしたり、調べ学習の補助に入りました。この経験がその後の授業実践に非常に役立ちました。自己紹介をした時に「嫌い or 苦手な教科はありますか?」と生徒たちに質問したところ、多くの生徒が「社会が苦手」と答えてくれました。他にも「歴史が苦手」「社会って“覚える”ことが多すぎて苦手」「地理って何を言っているかわからない」と答えてくれる生徒もいました。社会を担当する者からするとキツイですが、私はポジティブに捉えました。「じゃあ、実習期間中、社会が好きって思ってくれる子を1人でも作ろう!」と。また調べ学習の際に、苦手と答える生徒の中には、「苦手だけど〇〇には興味がある」「〇〇は知っている」という前向きな答えをくれた子もいました。これら生徒たちの“生の声”を踏まえて、「じゃあ、どうすればその苦手なマシになるか?」「どうすれば苦手が消えるか?」「どうすればすんなり覚えてもらえるか?」「興味があることと本時の内容に共通点はないか?」「既知の知識で考えることはできないか?」などということを常に考えながら、教材研究や授業づくり、授業改善を行いました。また、授業の都度アンケートを取り、生徒たちがどう感じているかを把握しました。「分かりやすい」「おもしろい」という嬉しい声をたくさんもらいました。しかし、「ここが分かりにくい」「こうしたらいいと思う」という声もそれなりにあり、それを踏まえてその都度改善していきました。このように、生徒たちと一緒に授業を作り上げていく、一緒に学んでいくという姿勢が、今日の授業、とりわけ「社会」の授業に足りていないと思います。というのも、「社会」という教科はどうしても事実を辿る学問ですから知識の提供、いわゆる“暗記”の強要に陥ってしまいます。それが子供達の苦手意識を刺激し、社会=暗記という悪いイメージに至らせていると思います。確かに暗記の側面は否定できませんが、暗記しようとしなくても自然に暗記出来ている、つまり“記憶”に残るようにすることが必要だと考えます。そのためにも、生徒たちとのコミュニケーションは必要です。例えば、直接会話したり、私のようにアンケートをとったり。「誰のために授業をしているのか?」社会科の先生が僕におっしゃってくれた言葉

ですが、「単に自己満足のために知識を一方向的に話す授業をする」のではなく、「生徒たちのために、生徒たちの関心をくすぐる授業をする。」このことに気付くことが出来たのは、教育実習で得た、一番の財産です。社会を担当される方、どうか生徒たちの「苦手意識」を分析してください。そのひと手間で授業実践の手ごたえ、質は格段に上がると思います。ぜひ、実際に生徒たちの“生の声”を聞いてみてください。応援しています!!

実習最終日、「先生、社会前より好きになったで!」「先生、次のテスト頑張る!」「先生、社会って幅広いし、面白いな!」と言ってくれる子が何人もいました。個人的には目標だった「社会が好きって思ってくれる子を1人でも作ろう」ということを達成できてよかったと思います。こうした生徒たちからの声を聞くことができること、生徒たちの成長を間近で感じるができることが、教職という仕事のやりがいではないかと思いました。

全部で14回の授業を行いました。授業1回1回、本当に様々な工夫が必要です。同じ内容でも、クラスによって伝わり方が違うし、時間によって集中度も変わる。自分の中で感触が良かった授業方法でも、時間やクラスが変わるだけで別物と思うぐらい変化しました。自分自身で事前に変更したり、授業中アドリブで変更したり、色々工夫してみて、いい結果につながる時もあれば、悪い結果につながることもあることを体感し、授業が持つ“無限性”(工夫1つでどんなものにも変化すること)に気付くことが出来ました。先述したように「授業は先生1人で作るものではなく、生徒と一緒に作るもの」ということを、授業実践を通じて、身をもって感じました。